

中国人日本語学習者による日中同形語の意味習得

—非漢字圏日本語学習者との比較を通して

Acquisition of Chinese-Japanese Cognates by Chinese Learners of Japanese : Comparison with Non-kanji-using Learners of Japanese

劉 楚心

LIU Chuxin

提要 本研究对以中文为母语的日语学习者和非汉字圈日语学习者实施了关于中日同形词的语句自然性判断任务。结果发现，以中文为母语的日语学习者对日中同形同义词的判断正确率最高，日中同形异义词或日中同形近义词的正确率较低。与非汉字圈日语学习者的结果进行对比发现，以中文为母语的日语学习者在日中同形同义词的正确率大大高过非汉字圈日语学习者，而在另两类词的正确率上两者没有差别。本研究使用了语言迁移理论对结果进行了讨论，认为以中文为母语的日语学习者在日中同形词的处理上很可能同时发生正向和负向迁移现象。

キーワード： 中国人日本語学習者 日中同形語 言語転移

目次

1. はじめに
2. 先行研究の検討
3. 調査の概要
4. 調査の結果及び分析
5. おわりに

1. はじめに

日本と中国は歴史的に言語文化の交流が盛んであるため、「日中同形語」が数多く存在している。「日中同形語」というのは「学校」、「緊張」、「文化」などのような日中両国語に存在する漢字語彙である。大河内（1992：180）は日中同形語を「日中で字面が同じ単語で、双方同じ漢字（簡体字は問わない）で表記されるもの」と定義している。このような「日中同形語」を学習する際に、漢字が同じなら用法も同じであろうと考える傾向になりやすく（張・谷村 2013）、中国語語彙から日本語語彙への意味推測が可能だと考えられる。しかし、

後述の通り、日中同形語とはいえ、必ずしも意味範囲または用法が同じであるとは限らない。意味に多少ズレがあるもの、または著しく異なるものも少なくない（上野・魯 1995）。実際中国人日本語学習者による日中同形語の誤用は多くの先行研究に取り上げられている（李 2006；張・谷村 2013 など）。このような「日中同形語」を学習する際に、母語とする中国語の知識をどのように生かしているのか、それは日本語の学習過程にいかなる影響を与えるのかは大変興味深い。

また、日本語の漢字を認識する際、非漢字圏日本語学習者（中国語、韓国語など漢字を使う言語以外の言語を母語とする日本語学習者）は中国人日本語学習者と異なる処理プロセスを持っている可能性が高いと考えられ、実際中国人学習者が漢字処理において母語からの影響が優位に働くという結果も見られた（玉岡 1994, 実験 2）。母国語は漢字表記を使用していない非漢字圏学習者の場合、中国語の漢字知識を持っていないため、日中同形語を習得する際に容易ではない一方、漢字知識による干渉や誤用が起こりにくいと考えられる。ゆえに、本研究は、日中同形語の習得において、中国語の母語知識による影響（言語転移）が存在するか否かを検証し、それに基づきどのように転移が働くかを解明することを目的とする。また、非漢字圏学習者との比較を通して、中国人日本語学習者の漢字語彙の意味習得における特徴を更に検討していく。

2. 先行研究の検討

2.1 日中同形語の分類

『中国語と対応する漢語』（文化庁 1978）（便宜上、以下は「文化庁 1978」と呼ぶ）は、漢語を表 1 のように一つ一つの漢字語彙の意味範囲及び用法の相違によって S、O、D、N の 4 種類に分類している。

表 1 『中国語と対応する漢語』（文化庁 1978）日中同形語の分類

類別	定義	二字漢語の例
S (Same) 語	日中両国語における意味が同じか、または、きわめて近いもの。	生活、学校
O (Overlapping) 語	日中両国語における意味が一部重なってはいるが、両者の間にずれのあるもの。	有数、緊張
D (Different) 語	日中両国語における意味が著しく異なるもの。	手紙、勉強
N (Nothing) 語	日本語の漢語と同じ漢字語が中国語に存在しないもの。	挨拶、我慢

その中、中国語に対応がない N 語を抜き、S 語、O 語及び D 語が本研究の研究対象である日中同形語として認められる。文化庁は S 語を「日中両国語における意味が同じか、ま

たは極めて近いものである」と定義し、S語グループの日中同形語は中国語でも日本語でも同じ意味用法で通用することが分かる。次、O語は日中両国語における意味が一部重なってはいるが、両者の間にずれのあるものである。日中両国語の意味分布により、O語グループをさらに三種類に分類できる：①O-1語：共通する意味があるが、日中それぞれ独自の意味を持っている②O-2語：日本語の方が独自の意味を持っている③O-3語：中国語の方が独自の意味を持っている。この三種類からなるO語グループは、意味が部分的に重複することにより、中国人日本語学習者の語彙の運用に誤用を生じ、混乱を招くことが考えられる。最後、D語の場合、日中両国語の意味範囲は離れて、重なっている意味はない同形語グループである。つまり、漢字が同じだが、意味用法が日中両国語において著しく異なるということである。本研究は、この文化庁（1987）の分類及び定義に従い、中国人日本語学習者の日中同形語（S語、O語、D語）に対する習得について検討する。

2.2 言語転移

外国語を学習する際に、すでに獲得している言語の知識・習慣の影響が出ることを「言語転移 (language transfer)」という。言語転移について、オドリン (1995) は以下のように定義している：

転移とは、目標言語と、どれにしる以前に（そして、ともすると不完全に）習得された他の言語との間の、類似点及び相違点から生じる影響をいう。

（オドリン 1995：32）

つまり、第二言語習得において母語の知識を運用して起こる影響を「母語転移」という。日中同形語の習得の場合、中国人学習者が母語とする中国語の漢字知識を喚起し日本語の習得や使用に影響を与えるのは母語転移と言える。もし中国語の漢字知識を使用して日本語習得を促進するならば「正の転移 (positive transfer)」が働いたと、逆に日本語習得の学習困難点となって学習や使用を妨げることを「負の転移 (negative transfer)」が働いたと言う。

母語と目標言語の語彙は形態上・意味上類似する場合には習得を促進する場合もあるが、知識の転用による誤解や誤用も生じている。また、「語彙的転移の事例は一般に形態的と意味的両者の転移」（オドリン 1995：94）があり、日中同形語の転移は形態的と意味的両者の転移からなっていると考える。中国人学習者は母語の漢字語彙知識を持っているため、日中同形語の習得には形態的な転移から意味的な転移まで両者の転移の可能性があると考えられる。

2.3 言語習得における母語転移の影響

連 (2013) は台湾の日本語学習者を対象とし、日中同形語における日中同形異義語（O語、D語）に関する認知度の調査を行った。文化庁（1978）の分類法に従い、O語とD語を調査語とし自然性判断テストを作成して調査を実施した。問題文の構成については、「日本語の

意味・文脈のみに従い作成した文」、「中国語の意味・文脈のみに従い作成した文」と「日本語でも中国語でも使われる意味・文脈で作成した文」の三種類になっている。その結果を見ると、認知度が高い（正答率が高い）のは「日本語でも中国語でも使われる意味・文脈で作成した文」、他の二種類はそれより認知度が低い（正答率が低い）。

そのほか、李（2006）は調査1「翻訳の選択肢課題」及び調査2「自然さ判断課題」による調査を実施し、中国人日本語学習者は漢語（二字漢語）の習得にどの段階でどのような種類の日中同形語が習得しやすく、どのような語彙が習得しにくいを考察した。その結果、調査1の「翻訳の選択肢課題」の結果からは、中国人学習者が日本語と中国語の意味がほぼ同じもの（S語）、日本語と中国語の意味が全く違うもの（D語）が誤用されにくい、言い換えれば習得しやすいということが分かった。一方、中国語の意味範囲の方が広いもの（O-3語）と日本語の意味範囲の方が広いもの（O-2語）は学習者のレベルに関わらず、誤用されやすいことがわかった。次に、李（2006：198）の調査2の「自然さ判断課題」では中国人学習者は日中同形語の習得には「日本語の意味・用法よりも自らの中国語の意味に従いながら日本語を学習している」という傾向が見られた。それに加え、日本語の判断課題には母語の影響が確かに存在していることが明らかになった。

2.4 先行研究の示唆による本研究の研究対象

上述した先行研究は単一の学習者に調査を行ったもの多かったが、その結果は母語による影響や学習者の特性によるものだと判定できるのだろうか。例えば、単なる中国人学習者のデータから傾向が見られていても、それは果たして中国人学習者の特性によるものなのか、または選定された調査語の特性なのかが分からない。言語転移の判定の客観性を保つためには、2ヵ国語以上の母語話者を対象とする調査が妥当である（奥野 2005：45）という示唆もある。先行研究の結果を踏まえながら、本研究は、中国語を母語とする学習者に加え、中国語の漢字知識を持っていない非漢字圏学習者をも研究対象としながら、日中同形語における言語転移の影響の可能性を検討したものである。

3. 調査の概要

3.1 調査対象者

本調査の参加者は、当時東北大学に在籍する学生 55 名を対象であった。内訳として、中国語を母語とする中上級日本語学習者 20 名（以下「中国人学習者」）、非漢字圏中上級日本語学習者 20 名（以下「非漢字圏学習者」）、日本語母語話者 15 名であった。調査紙の項目が適当であるかどうかを確認するため、日本語母語話者のデータも収集した。中国人学習者と非漢字圏学習者は全員、日本語能力試験 N1 か N2 に合格している、または、N2 レベル以上である¹⁾ことが認められた学生である。調査参加者の国籍、日本語レベル、日本滞在歴を表

2に示す。

表 2：調査者プロフィール

調査対象	母語	日本語レベル	日本滞在歴	合計
中国人 学習者	中国語	日本語能力試験 N1 または N2 レベル以上	4 ヶ月～6年 (4 ヶ月～2年が 80%を占める)	20 人
非漢字圏 学習者	ロシア語、スウェー デン語、タイ語等 7 カ国語	日本語能力試験 N1 または N2 レベル以上	4 ヶ月～7年 (4 ヶ月～2年が 85%を占める)	20 人

3.2 正誤テスト調査の材料

対象語彙は、「文化庁 1978」、日本語能力試験 N1 過去問題集、上野・魯 (1995)、連 (2013) を参考に、S 語、O 語、D 語それぞれ 12 語ずつ選定した。質問紙調査の判断文はこの 36 語の対象語彙を使って、先行研究からの借用及び作例によって計 36 問の自然性判断テストが作成された。O 語と D 語の意味範囲の選択において、日中で重なる意味とズレがある意味のバランスを取って「○」と「×」の割合を考えて設定した。対象語彙のレベルに関して、『日本語能力試験出題基準【改訂版】』(2002) を参考にして、最大限に中級レベルの日常語彙から N1 レベルを超えない範囲に絞った。各グループの例を表 3 に示す。

表 3 自然性判断調査の例

	単語	(正解) 自然性判断テストの例文	意味分布	レベル
S 語	余地	「○」何が公正であるかについては、 <u>議論の余地</u> があります	日○ 中○	中級レベル～
O 語	深刻	「×」今回の海外旅行は私の心に <u>深刻</u> な印象を残している。	日× 中○	N1 レベル
D 語	看病	「○」看護婦は心をこめて患者を <u>看病</u> する。	日○ 中×	

3.3 調査方法

下線が引かれた対象語彙は、その日本語の文において自然かどうかを調査者に判断してもらった。自然だと判断する時は空欄に「○」を、不自然だと判断する時は「×」を付けるという形で解答してもらった。時間の制限は特になかったが、辞書を引かずに自力で回答するように指示した。

3.4 仮説

3.4.1 正の転移 (S 語)

S 語は日中同形同義語で、意味が日中で極めて近いいため、S 語を含む文の自然性判断に正

の転移が働くことにより、正答率がO語グループ、D語グループより高いと予測できる。また、中国語の漢字知識の喚起がより有利になるため、中国人学習者のS語の正答率は非漢字圏学習者の正答率を上回ると予想される。

3.4.2 負の転移 (O語及びD語)

S語と異なり、O語とD語は意味が一部重なってはいるが、ズレがあるまたは意味が全く異なるため、O語とD語を含む日本語の文の自然性判断においては、中国語意味の喚起により混乱を招いて、負の転移が起こる可能性が高いと考えられる。この場合、中国人学習者は中国語の独自義でも日本語として自然であろうと誤った判断をしてしまえば、中国語の漢字知識を持っていない非漢字圏学習者は逆に有利になるかもしれない。

4. 調査の結果及び分析

4.1 調査データの処理及び調査結果

データを統計にかける前に、日本語母語話者のデータにおいて6つの語彙 (S語2語、O語2語、D語2語) の正答率が80%も満たさなかったためデータから抜いた。最終的に、調査参加者 (合計55名) の30語 (S語10語、O語10語、D語10語) の自然性判断テストから得られたデータを分析した。各調査参加者グループの自然性判断テストの正答率を語彙タイプ (S語 vs. O語 vs. D語) 1元配置ANOVAにより分析した。また、中国人学習者と非漢字圏学習者のデータを比較するため、両者の自然性判断テストの正答率を3(語彙タイプ : S語 vs. O語 vs. D語) × 2(言語背景 : 中国人学習者 vs. 非漢字圏学習者) 二元配置反復測定ANOVAにより分析した。調査参加者による正答率のデータを図1に示す。

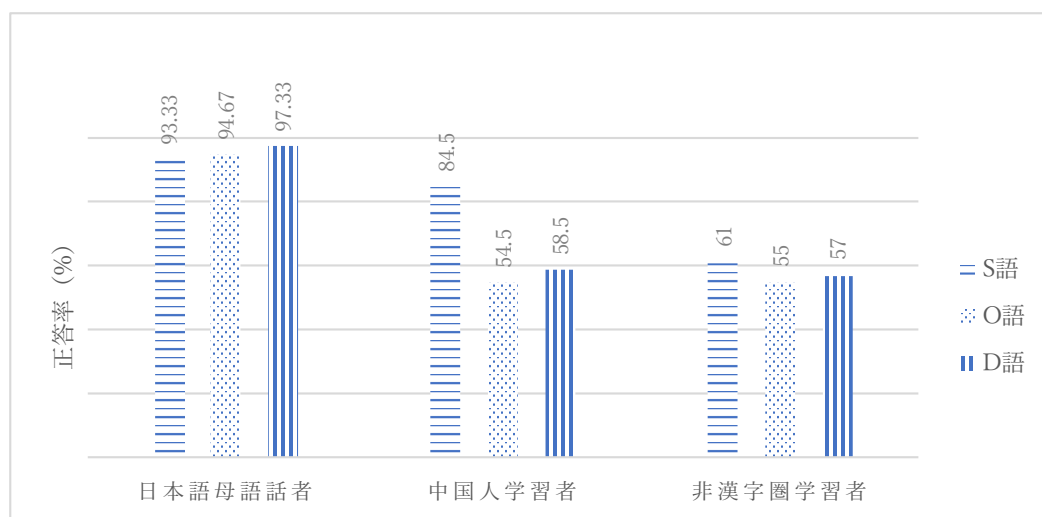


図1 調査参加者の正答率 (%)

4.1.1 日本語母語話者の結果及び分析

日本語母語話者の正答率における語彙タイプの影響を分析するために分散分析を行った。その結果、語彙タイプの効果は有意ではなかった ($F(2,44)=1.45, p=.25$)。予測通りに、日本語母語話者の場合、日中同形語の語彙タイプによる影響がなかったことが分かった。

4.1.2 中国人学習者の結果及び分析

中国人学習者の正答率における語彙タイプの影響を分析するために分散分析を行った。その結果、語彙タイプの効果は有意であった ($F(2,59)=20.11, p<.001$)。そこで有意水準 5%で両側検定の t 検定を行ったところ、O語とD語の間で有意差が観察できなかった ($t(19)=-0.82, p=.42$)。S語は、O語とD語の間でいずれも有意差が見られた (**both ps > .001**)。中国人学習者の場合、日中同形語の意味が同じかまたはきわめて近いと定義される S語は、他のグループに比べ、正答率が有意に高かったことから、S語の習得において比較的容易であることが考えられる一方、意味が著しく異なる語 (D語) や、たとえ意味が一部重なっていてもズレがある語 (O語) の場合、何らかの影響で誤判断を多く起こしたことが明らかになった。しかし、この結果は中国人学習者の特性 (例えば、漢字の影響) によるものなのか、日本語学習者の共通している特性によるものなのかはわからなかったため、非漢字圏学習者のデータとの比較を通して分析してみた。

4.1.3 非漢字圏学習者の結果及び分析

非漢字圏学習者の正答率における語彙タイプの影響を分析するために分散分析を行った。その結果、語彙タイプの効果は有意ではなかった ($F(2,59)=.56, p=.58$)。語彙タイプによる効果の面では、非漢字圏学習者は日本語母語話者の結果と一致し、日中同形語の意味分布によって分類された語彙タイプが、非漢字圏学習者の自然性判断に影響がなかったことが分かった。

4.1.4 中国人学習者の結果と非漢字圏学習者の結果の比較

中国人学習者と非漢字圏学習者の正答率を分析した結果、語彙タイプの主効果 ($F(2, 76)=13.63, p<.001$) 及び、言語背景 (中国人学習者 vs. 非漢字圏学習者) による主効果が有意であった ($F(1, 38)=5.68, p<.05$)。つまり、語彙タイプ及び言語背景は自然性判断テストの正答率に大きな影響を与えたことがわかった。最後、語彙タイプと言語背景の交互作用も有意であった ($F(2, 76)=6.50, p<.05$)。それは、言語背景によって、語彙タイプへの影響が異なり、この三つのグループの正答率のパターンは両言語背景者により異なることを意味している。そして、単純主効果を行ったところ、S語の2群の間で有意差が見られたが ($t(19)=5.24, p<.001$)、O語の2群の間とD語2群の間で有意差が観察できなかった (**both p > .75**)。この結果は、中国人学習者のS語の正答率は非漢字圏学習者のS語の正答率をより上回っていた、また、O語とD語の正答率に関しては、中国人学習者と非漢字圏学習者の間で差がなかったことを意味している。

5. おわりに

本研究は、日中同形語における3種類の語（S語、O語、D語）を含む文に対する自然性判断テストの正答率をデータとし、中国人学習者と非漢字圏学習者の正答率を比較しながら、中国人学習者の母語である中国語の漢字知識が日中同形語を処理する際にどのような役割を果たすのかを探ろうとしたものである。その結果、中国人学習者の場合、予測通りに、意味が同じかまたはきわめて近いS語の場合で、非漢字圏学習者の正答率を大きく上回っている。この日中同形同義語であるS語を処理する優位性は中国語母語話者が持っている漢字知識によるもの、いわゆる正の転移によるものだと考えられる。日中両国語における字形と意味が通用しているため、中国人学習者によって、習得においても運用においても比較的容易であることが考えられる。負の転移を中心に誤用分析を通して日本語教育へ提案する先行研究が多かったが、正の転移が生じることが中国人学習者の優位性を最大化することができるため、この日中同形同義語の習得や処理における正の転移にも注目する必要があると考える。

また、正の転移が生じる一方、予想外だったのは、意味が著しく異なるD語や、意味が一部重なっていてもズレがあるO語の場合、非漢字圏学習者と比べて大差なかったことである。非漢字圏学習者に比べ、中国人学習者はO語とD語の習得には中国語知識の干渉により、負の転移が働く可能性が高い。本研究は、中国人学習者は日中同形語を習得や運用する際に言語転移が働き、日中同形同義語（S語）の習得には正の転移、日中同形異義語（O語、D語）には負の転移が働く可能性を示唆している。

しかし、本研究のデザインでは、中国人学習者の特性により日中同形語の習得に転移が働く可能性が高いことがわかったが、中国人学習者と非漢字圏学習者の誤りの理由が異なるかどうかは判別できない。非漢字圏学習者のO語、D語における比較的にながった正答率から、調査協力者はN2レベルに相当するにもかかわらず、漢字語彙は彼らにとって一難関であることかもしれない。O語とD語においては、中国人学習者と非漢字圏学習者はよく似た状況にあるという解釈も可能だと考える。この課題を解決するには、今後、on-line課題によりさらに日中同形語の処理における言語転移の可能性やメカニズムを検討する必要がある。

注

- 1) 東北大学特別課程レベル4（中級）とレベル5（中上級）科目を受講している学生は、N2レベルの能力と相当する日本語能力を持っていると認められている

参考文献

- 上野恵司・魯曉琨（1995）『覚えておきたい日中同形異義語300』光生館
大河内康憲（1992）「日本語と中国語の同形語」『日本語と中国語の対照研究論文集（下）』く

ろしお出版：179-215

- 奥野有紀子（2005）『第二言語習得過程における言語転移の研究——日本語学習者による「の」の過剰使用を対象に——』風間書房
- オドリン.T. 著・丹下省吾訳（1995）『言語転移』リーベル出版
- 河住有希子（2005）「中国人学習者の漢字語彙使用に見られる問題点」『早稲田大学日本語教育研究』第7号、早稲田大学大学院日本語教育研究科：53-65
- 何宝年（2011）「『中日同形語』の定義」『愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会言語文化』第19巻、愛知淑徳大学言語文化学会：35-49
- 玉岡賀津雄（1994）『仮名と漢字による語彙処理のメカニズム—日本語学習者の学習歴と言語背景による影響』松山大学総合研究所所報（15）：1-101
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会（2002）『日本語能力試験出題基準【改訂版】』凡人社
- 張金艶・谷守正寛（2013）「中国人日本語学習者による日中同形語の誤用について—共有する意味を持つ『参考』『緊張』『注意』『一時』の場合—」『鳥取大学教育研究論集』（3）、鳥取大学大学教育支援機構教育センター(教職教育部門)：59-67
- 文化庁（1978）『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局
- 李愛華（2006）「中国人日本語学習者による漢語の意味習得：日中同形語を対象に」『筑波大学地域研究』26、筑波大学大学院地域研究研究科：195-203
- 連國鈞（2013）「台湾人日本語学習者における日中同形語の認知度」『桜美林言語教育論叢』（9）、桜美林大学言語教育研究所：pp. 51-66

付記

本稿は、平成30年度東北大学大学院国際文化科修士論文「漢字語彙における日中同形語の習得に関する研究」をもとに、加筆修正してまとめたものである。